

《黒塚》「白頭」寸考

帝塚山大学人文学部講師 恵阪 悟

《黒塚》は秋の能である。内容から夏に夜能などで上演されることもあるが、曲趣からいえば秋がふさわしく、例年、九月から十月に各所で上演されることが多い。今回、鑑賞会でこの《黒塚》が上演されるのは、実に時宜を得た選曲といえよう。

本曲はシテ方五流が所演曲としており、観世流のみ曲名を《安達原》とする。演能記録の初出である、寛正六（一四六五）年二月二十八日、室町幕府八代將軍足利義政の院参の際の観世演能には《あたちかはら》とあり（『親元日記』。演者は世阿弥の甥で、三世観世大夫の音阿弥、そちらが当初の曲名であった可能性もある。もともと右以外に本曲を《糸繰り》と呼んだ例もあるので『禪鳳雑談』など。禪鳳は世阿弥の曾孫）、いずれを本来の曲名とするかは判断がむずかしい（以下、便宜上《黒塚》と呼ぶことにする）。

右の演能記録が示すように、《黒塚》は室町時代前期に成立していた古曲であるが、作者については、他の多くの曲がそうであるように、それを明らかにする資料は伝存していない。室町時代後期に多く作られた作者付によれば、『近江能』（『能本作者注文』（『江州へ遣 世阿 異作』（『自家伝抄』）などの注記が見られ、近江猿楽との関連がうかがわれるものの、近江の作風が判然としないため、現状では可能性にとどまっている。

それはさておき、《黒塚》は室町時代の演能記録が比較的多く、江戸時代に入って、寛文（一六六一）元年に幕府に提出された書上（上演可能曲目録）以来、現在に至るまで五流のレパートリーの中にあり、江戸期版行の謡本でも常に内組に所収されるなど、いわゆる人気演目の一角を占めてきたといえる（ちなみに金剛流における演能記録は、正保四（一六四七）年二月十四日、興福寺新能での金剛大夫の所演が、現在知られている中では最も古い）。その故であろうか、各流で様々な演出が工夫され、それが小書として現在に伝えられている。金剛流には「黒頭」「糸車」、これらに類似するものとして観世流に「黒頭」「長糸之伝」、金剛流独自のものに「赤頭」（ただし金春流は常の演出が赤頭）、観世流独自のものに「急進之出」などがある。いずれも前後のシテの立、杵杵輪を繰る場面や後シテの登場段に常の演出とは変化がある。そして各流が共通して持つ小書が、本日上演される「白頭」である（金春流では「替装束」とも称える。喜多流では「替装束」が一般的な小書名称で、立立に黒頭と白頭の両様がある）。《黒塚》の「白頭」は、横道萬里雄氏の『能にも演出がある』（平成十九年、檜書店）によれば、「白頭の小書は、鬼畜の役を老体として演ずるというのが演出の基本ですが、この能ではすこし趣旨が違ふようです。この能の前シテは、もともと人生を苦しんで生きて来た年輩の女性として描いてあり、それを老体とすることで、いっそう

深い感慨の表現を示すもの、とそう考えてよいようです。その老体を引き継ぐために、後ジテを白頭の鬼とする」という演出意図のもとに創案された小書のようなが、この「白頭」の小書に関して、創案時期についての私見を述べようとするのが、本稿の目的である。

結論を先にいってしまえば、この演出の創案時期はさほど古いことではなく、江戸時代後期に入ってからのことと思われる。《黒塚》の「白頭」演出による演能記録は、嘉永四（一八五二）年五月十五日、江戸城本丸奥能での宝生大夫所演が、管見に入った江戸時代以前の最初の記録であり（『触流し御能組』による）、それ以前にこの小書が記された番組は見当たらない。それがすなわち、「白頭」の演出が江戸時代後期の嘉永頃を隔たらない時期に創られたと考える根拠であるが、もつとも、番組に小書を書き出すのは江戸時代中期以降の慣習なので、それ以前にこの小書が成立していなかったとはい切れず、絶対的な根拠とはならない。そこで、番組以外の資料に当たってみると、例えば演出資料としては最古に属する『舞芸六輪次第』には、

一、あたちか原。くろつか、いとくりともいふ。して、まへハ女。しつめのてい也。小袖に水衣、玉たすきを上ル。後はつねの打たる鬼女の面。うちつえを持。わき、山伏二人。

とあり、「白頭」に関する記述はない。以下、一々の内容紹介は略すが、『妙佐本仕舞付』『金春安照装束付』『童舞抄』『宗随本古型付』『観世流舞附』『盛勝本衣裳付』など、手近にある上掛り・下掛りそれぞれの演出ならびに装束付資料で

確認した範囲でも、やはり「白頭」に関する記述は見られない。右に見た資料は室町期から江戸時代初期に成立したもので、つまりその時期には《黒塚》に「白頭」の演出はなかったと考えることができる。次に江戸時代中期の様相についてみると、紀州藩抱えの能役者であった徳田隣忠が著した『隣忠秘抄』には、

衣裳、腰巻抜け。鱗箔の時は出羽に打せ出る。尤も打杖、柴を括りて負ふ。面、般若、安達女。又法被半切赤頭の時は早笛にて出る。面同断。但し金剛は腰巻出羽を本とし、法被半切赤頭早笛を替とす。

とあり、現在の金剛流の小書「赤頭」に連なってくる記述が見られるものの、前代の資料と同じく「白頭」に関する記述はない。さらにもう一点、江戸後期の寛政七（一七九五）年と十年に五座の大夫らが幕府に提出した書上（いわゆる「寛政書上」）について見ておきたい。先にも述べたように、書上は提出時点での各流上演可能演目の目録だが、「寛政書上」ではそれに加えて当時演じられていた各流の小書も幕府に報告されている。そしてこの書上では、すべての座が《黒塚》を所演曲として掲出しているが、やはり小書の項に「白頭」は書かれていないのである。

以上、ごく限られた範囲の資料を検したのみであるが、宝生大夫の上演以前に《黒塚》「白頭」の演出が存した形跡はなく、この小書が江戸時代後期になって新たに創案された可能性は高いといえるだろう。そうであれば、その創案者と各流が流儀の小書としていく状況が新たな問題点として浮上するが、今はまだ述べる用意がない。